

## 総括

—— 切る力・つなぐ力としての良心 ——

## 出会いの体験と良心

- ・ 新島はアメリカで conscience と出会い、それを「体験」した。
- ・ 新島は、抽象概念や狭い意味での道徳律として「良心」を求めたのではない。
- ・ 具体的な出会いの中で、良心の「語り」(narrative)と「実践」を体得していく。



## 良心の継承

- ・ 「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」  
(旧約聖書「イザヤ書」2章4節)
- ・ 「**一国の良心**」から「**世界の良心**」へ

## (復習) 現代における「良心」

- ・ 自分自身を深く振り返ることのできる「良心」 (**内に向かう良心**)
- ・ 共同感覚としての「良心」 (**外に向かう良心、体験の良心**)
- ・ 国家主導の「道徳教育」と一線を画する「良心教育」  
(**良心の社会的次元**)
- ・ 地域・世代を超えた「共に知る」ことの実践 (**良心の共同体**)

## 「良心」の哲学的・倫理的探求

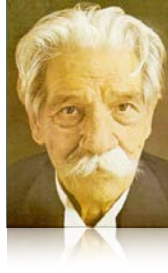
- ・ 新島襄の影響を受けた哲学者
- ・ 大西 祝「良心起源論」、小坂国継『大西 祝選集1 (哲学篇)』岩波書店、2013年(岩波文庫)。
- ・ 良心の個人的次元と社会的次元
- ・ 良心ある国家は存在するのか?
- ・ 良心をいかに実践するのか? 例: 良心的兵役拒否



## アルベルト・シュヴァイツァー

「断じて鈍感にされてはならない。われわれが（倫理的）葛藤をいよいよ深く体験するならば、われわれは真理のなかにある。疚しくない良心などは、悪魔の発明である。」

（『文化と倫理』（著作集第七巻）322頁）



## 現代における「良心」の展開

- ・ 切る力 (disjunctive power) としての良心
  - ・ 「自治自立の人民」（同志社大学設立の旨意）
  - ・ 「同志社は偶像不羈（てきとうふき）な学生を圧迫しないで、できるだけ彼らの本性に従って個性を伸ばし、天下の人物を養成すること」（遺言）
- ・ つなぐ力 (conjunctive power) としての良心
  - ・ 「人ひとりは大切である」（同志社創立10周年、1885年）
  - ・ 地方教育論（1882年）